

今回の展示はアキュムレーション(集積)の作家として著名なアルマン氏(ARMAN, 1928生れ)の個展である。彫刻3点, オブジェ(マルティプル)9点, そして版画数点のささやかな展示であるが, アルマンの世界の一端をごらんいただければ幸いである。

アルマンの作品を最初に意識したのは今から丁度10年前, 1970年に大阪で催された万国博の万博美術館で彼の作品を見た時である。当時, わが国は高度成長の絶頂期であり, 銀行に勤めていた小生は猛烈に忙しかった。関西出張の機をとらえ, 一日万国博をみた。その前日, R社のMさん達と夜遅くまで痛飲したこともあり体調が充分でないうえ, 暑い盛りときている。また仕事に関係のある企業の展示館をみないわけにはいかない。そんなわけで一番みたいと思っていた美術館の方に十分な時間がとれず, かけ足で廻らざるを得なかった。しかしながらコンテンポラリー・アートのセクションでアルマンの作品(写真参照)に出逢った時の印象は今もって鮮やかである。

透明なプラスチックのトルソのなかに鮮明な絵具のチューヴが流し込まれている。これは異様であった。それにショックを受けた。と同時に美しいと思った。この両者の思いがけない絶妙なる出逢いにリリックなものを感じた。それにこの作品のタイトル, “私の愛の色”というネーミングはウマイなと思った。二日酔いがふきとぶような強烈な刺激であった。

アルマンがアキュムレートする物品は例えばメガネ, ポット, ハサミ, ブラッシ, ペンチ, ライトヴァルブ, ウオッチ, タイプライター, ガスマスク, ガン等々から雑多なゴミ, ガラクタの類いまですべて高度に発展した消費文明社会のなかで大量生産方式により生産された物品であると言ってよい。アルマンは使用済の疲れ切っ

た廃品、ガラクタの類いをアキュムレイトして、われわれの前に全く新しい表情をもった作品を提出してくれる。それが新鮮なショックをわれわれに与える。アルマンは廃品そのもののアキュムレイションから工業製品の部品(例えばルノー自動車の部品)、さらにはここに展示されている作品のようにブロンズで抜いた物品のアキュムレイションも作成するようになってきている。

またアルマンはアキュムレイションと全く反対の仕事例えばヴァイオリンなどをバラバラに破壊したり切り刻んだりするような仕事“ディストラクション”もやっている。この両者の併存は彼にとって矛盾したものではなく全く同価値の仕事なのだ。というのもアルマンは、われわれが住んでいる社会が生産、消費、破壊というサイクルによってくみこまれているという認識に立っているからである。それらが等価である所以である。

それにしてもアルマンの作品をみていると、いまやわれわれをとりまく自然環境とは田園的なそれではなく、マスプロダクションでとりまかれている人工的都市的な自然なのだ、ということを改めて思い知らされるのである。

ところでヘンリー・マーチン氏(HENRY MARTIN)が“ARMAN”(1973年ABRAMS刊)に記しているアルマンの略伝を読むとなかなか面白い。というのは彼がアキュムレイションの作家として認められるまでの期間、大変小説的なエピソードに満ちた生活をしており、この作家を理解するうえにも意味があると思うので、一寸紹介しておきたい、なお彼の個展歴を巻末に添付しているので併せてご参照いただきたい。

1928年11月17日ニースに生れる。Armand Fernandez, (注、現在氏の名刺ではArmand Pierre Arman となっている)。34年:風変りな境遇のためCours Poizat (少女のための学校)に入り40年までここで学ぶ。36年:チェスゲームへの一生を通じての熱中が始まる。(注・現在は碁についても大変熱心であるときく)。38年:父親の指導のもとで油絵を習い始める。40年:ニースのLycée (中学)に入るが即座に追放される。40~46年いろんな寄宿学校に入ったが追放され最後にニースのLycéeに戻る。46年:哲学と数学のバカロレア(大学入学資格)をとる。ニースのÉcole Nationale d'Art Décoratif に入学する。47年:Yves Klein と Claude Pascal に出会

い、ともにヨーロッパをヒッチハイクでまわる。この三人はその姓を捨てて、ファーストネームだけで世に知られようときめる。49年:ニースの上記の学校を理事者と意見が衝突し退学する。École du Louvre に入学のためパリに行く。シュルレアリスムペインティングの時期が始まる。51年:École du Louvreを去り武士道会柔道スクールの教師となる。52年:インドシナ戦争の間、フランス軍隊に召集される。53年:抽象絵画への興味が始まる。丁度日本から帰国したKlein とともにハプニングとイベントのシリーズに入る。47~53年までは禪、Rosicrucians (注、バラ十字会、17~8世紀ヨーロッパで起った密教的秘密結社)、Gurdjieff(?), 占星術などに精神的知的な興味をもつ。これらのものにKleinやPascalも同様の興味を持ったことによって彼等の友情は深まった。Eliane Radigue と結婚。55年:最初の cachets (注、キヤシェ、印章、アルマンの最初の仕事)。家具のセールスやスキューバ・フィンシングなどのアルバイトで生計をたてる。56年:最初の個展がパリの Galerie Haut Pavé で開催。57年:イラン、トルコ、アフガニスタンへの長い旅。58年:印刷屋のミスでカタログ・カバーの彼の名前のDが抜けて印刷されたが、彼はその方がよいとしてそうきめる。(注、ここでARMANが生まれた。) allures (アリアル)の時代が始まる。59年:破壊、pmbelles (ゴミ箱)と集積 accumulation の時代が始まる。60年:ニューレアリストの創立メンバーとなる。パリのGalerie Iris Clertで“Le Plein”(Full-up)展。(注、これは一種のハプニングでトラック2台分のガラクタをギャラリーのなかにつめこんだ。つめ込まれたガラクターオブジェのリストは完備している)。……以下略。

アルマン氏はこの4月バルール画廊の池田昭氏の招きで来日、名古屋で仕事をされ、一方バルール画廊では彫刻展(4月5~26日)が開催された。6週間ばかり滞在の予定であるが、いい仕事が生れることを期待するとともにアルマン夫妻の日本での滞在が実り多いものであることを祈っている。この展示に当ってはバルール画廊の池田昭氏から全面的なご協力を得た。改めて感謝の意を表する次第である。

1980年5月6日 佐谷画廊

佐谷和彦